

**10.8** 第11回 読響メトロポリタン・シリーズ  
 〈水〉東京芸術劇場コンサートホール／19時開演

The 11th Yomikyo Metropolitan Series  
 Wednesday, 8th October, 19:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

**10.9** 第541回 定期演奏会  
 〈木〉サントリーホール／19時開演

The 541st Subscription Concert  
 Thursday, 9th October, 19:00 / Suntory Hall

**10.11** 第75回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ  
 〈土〉横浜みなとみらいホール／14時開演

The 75th Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series  
 Saturday, 11th October, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall

指揮 **スタニスラフ・スクロヴァチェフスキ** (桂冠名誉指揮者) **6ページ**

Conductor STANISLAW SKROWACZEWSKI (Honorary Conductor Laureate)

コンサートマスター 長原幸太  
 Concertmaster KOTA NAGAHARA

ブルックナー **交響曲 第0番** ニ短調 WAB. 100 [約46分] **10ページ**

BRUCKNER / *Symphony No. 0 in D minor, WAB. 100*

- I. Allegro
- II. Andante sostenuto
- III. Scherzo. Presto
- IV. Moderato (Andante) – Allegro vivace

[休憩 Intermission]

ベートーヴェン **交響曲 第7番** イ長調 作品92 [約36分] **12ページ**

BEETHOVEN / *Symphony No. 7 in A major, op. 92*

- I. Poco sostenuto – Vivace
- II. Allegretto
- III. Presto
- IV. Allegro con brio

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金(トップレベルの舞台芸術創造事業)(10/9・11)

[協力] **アフラック**(アメリカンファミリー生命保険会社)(10/9)、横浜みなとみらいホール(10/11)

[事業提携] 東京芸術劇場(10/8)

**10.17** 第575回 サントリーホール名曲シリーズ  
 〈金〉サントリーホール／19時開演

The 575th Suntory Hall Popular Series  
 Friday, 17th October, 19:00 / Suntory Hall

**10.19** 第170回 東京芸術劇場マチネーシリーズ  
 〈日〉東京芸術劇場コンサートホール／14時開演

The 170th Tokyo Metropolitan Theatre Matinée Series  
 Sunday, 19th October, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮 **ペトル・ヴロンスキー** **7ページ**

Conductor PETR VRONSKY

コンサートマスター 小森谷巧  
 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

スーク **弦楽のためのセレナード** 変ホ長調 作品6 [約30分] **13ページ**

SUK / *Serenade for Strings in E flat major, op. 6*

- I. Andante con moto
- II. Allegro ma non troppo e grazioso
- III. Adagio
- IV. Allegro giocoso, ma non troppo presto

[休憩 Intermission]

マーラー **交響曲 第1番** ニ長調 〈巨人〉 [約53分] **14ページ**

MAHLER / *Symphony No. 1 in D major "Titan"*

- I. Langsam. Schleppend. – Immer sehr gemächlich
- II. Kräftig bewegt, doch nicht zu schnell
- III. Feierlich und gemessen, ohne zu schleppen
- IV. Stürmisch bewegt

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金(トップレベルの舞台芸術創造事業)(10/19)

[事業提携] 東京芸術劇場(10/19)

**10.23** 第4回気楽にクラシック～ヨーロッパ音楽紀行～  
 〈木〉東京オペラシティ コンサートホール／20時開演 (19時30分から解説)

The 4th "Enjoy classic!" Series Thursday, 23rd October, 20:00  
 (Pre-concert talks from 19:30) / Tokyo Opera City Concert Hal

指揮 **ペトル・ヴロンスキー** [7ページ](#)  
 Conductor PETR VRONSKY

ピアノ **清水和音** [9ページ](#)  
 Piano KAZUNE SHIMIZU

解説 **小宮 正安** [15ページ](#)  
 Lecturer MASAYASU KOMIYA

ナビゲーター **中井美穂** [15ページ](#)  
 Navigator MIHO NAKAI

コンサートマスター 日下紗矢子  
 Concertmaster SAYAKO KUSAKA

《モーツァルトも愛した街、プラハ》

モーツァルト **ピアノ協奏曲 第23番** イ長調 K. 488 [約26分] [16ページ](#)

MOZART / Piano Concerto No. 23 in A major, K. 488  
 I. Allegro  
 II. Adagio  
 III. Allegro assai

ドヴォルザーク **交響曲 第8番** ト長調 作品88 [約34分]

DVOŘÁK / Symphony No. 8 in G major, op. 88  
 I. Allegro con brio  
 II. Adagio  
 III. Allegretto grazioso  
 IV. Allegro ma non troppo

※本公演には休憩がございません。あらかじめご了承ください。

\*No intermission

【監修】小林研一郎 (特別客演指揮者)

【主催】読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団  
 【後援】チェコ共和国大使館

**10.28** 非破壊検査 Presents 読売日本交響楽団 大阪定期演奏会  
 〈火〉ザ・シンフォニーホール／19時開演

Subscription Concert in Osaka, presented by Non-Destructive Inspection  
 CO., Ltd Tuesday, 28th October, 19:00 / The Symphony Hall in Osaka

指揮 **ラドミル・エリシュカ** [8ページ](#)  
 Conductor RADOMIL ELIŠKA

ピアノ **河村尚子** [9ページ](#)  
 Piano HISAKO KAWAMURA

コンサートマスター 日下紗矢子  
 Concertmaster SAYAKO KUSAKA

スメタナ **歌劇〈売られた花嫁〉序曲** [約7分] [18ページ](#)

SMETANA / "The Bartered Bride" Overture

モーツァルト **ピアノ協奏曲 第21番** ハ長調 K. 467 [約29分] [19ページ](#)

MOZART / Piano Concerto No. 21 in C major, K. 467  
 I. Allegro  
 II. Andante  
 III. Allegro vivace assai

[休憩 Intermission]

ドヴォルザーク **交響曲 第9番** ホ短調 作品95 〈新世界から〉 [約40分] [20ページ](#)

DVOŘÁK / Symphony No. 9 in E minor, op. 95 "From the New World"  
 I. Adagio - Allegro molto  
 II. Largo  
 III. Molto vivace  
 IV. Allegro con fuoco

【主催】読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団  
 【特別協賛】 非破壊検査株式会社  
 【協力】ザ・シンフォニーホール

※本公演では読売テレビの収録が行われます。

その存在は、もはやレジェンド  
91歳現役マエストロの至芸

## スタニスラフ・ スクロヴァチェフスキ

(桂冠名誉指揮者)

Stanislaw Skrowaczewski  
(Honorary Conductor Laureate)

- ◇10月8日 読響メトロポリタン・シリーズ
- ◇10月9日 定期演奏会
- ◇10月11日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ



©読響(撮影:堀田力丸)

2007～10年、読響の第8代常任指揮者を務め、現在は桂冠名誉指揮者の地位にある。これまでに築きあげた名演の数々により、楽団員から大きな尊敬を集め、聴衆から熱狂的に支持されている。10月3日には91歳の誕生日を迎える。

1923年、ポーランドのリヴォフ（現在はウクライナ領）生まれ。4歳でヴァイオリンとピアノを始め、7歳でオーケストラ曲を書き、11歳で公式リサイタルを開いてピアニストとしてデビューした。しかし、第2次世界大戦中に空襲で負った手の傷がもとで、ピアニストの道を断念。以降、作曲と指揮の勉強に向かった。大戦終結後、クラクフでワルシャワ・フィルを指揮した際、時のフランス大使が感動したことが縁となり、奨学金を受けて2年間パリに留学。まだ西側に出ることが困難な時代だったが、そのパリで熱心に作曲を学んだ。

40年代後半から本格的な指揮活動に入り、ポーランド各地のオーケストラの指揮者や音楽監督を歴任し、56年にはローマの国際指揮者コンクールで優勝した。クリーヴランド管を指揮した58年のアメリカ・デビュー以降、アメリカ各地のオーケストラに客演。その後、60年から20年近くにわたってミネソタ管の音楽監督を務めた。その後はワルシャワ・フィルの首席指揮者、英・ハレ管の首席指揮者を務め、現在はミネソタ管の桂冠指揮者のほか、ザールブリュッケン・カイザースラウテルン・ドイツ放送フィルの首席客演指揮者の地位にある。アメリカ国籍を得て、ミネアポリスを拠点に世界各地で活躍している。

世界的ヒットとなったブルックナーの交響曲全集など、録音も数多い。読響とも多くのCDをリリースしており、最新盤は「ショスタコーヴィチ／交響曲第5番、ベルリオズ／劇的交響曲〈ロミオとジュリエット〉から“愛の情景”」で、9月17日に発売された。

震災直後に来日した熱き名匠  
得意とするレパートリーで再登場

## ペトル・ ヴロンスキー

Petr Vronsky

- ◇10月17日 サントリーホール名曲シリーズ
- ◇10月19日 東京芸術劇場マチネシリーズ
- ◇10月23日 気楽にクラシック



©読響

1946年プラハ生まれ。ヴァイオリニストとして活動した後に指揮者に転向。71年のブザンソン国際指揮者コンクール、また73年のカラヤン国際指揮者コンクールにそれぞれ入賞し、指揮者デビューを飾った。オペラからコンサートへとレパートリーを順次拡大し、母国チェコのオーケストラを中心に活躍している。

定期的に指揮しており、チェコ・フィル、プラハ響、プラハ放送響のほか、首席指揮者を務めたブルノ国立フィル、ヤナーチェク・フィルとは、ドイツ、フランス、スペイン、台湾、日本などへのツアーも行っている。またブルノ国立フィルとは数多くの録音も残している。2006年から、オロモウツ・モラヴィア・フィルの首席指揮者を務めている。

国外ではこれまでにアンカラ・フィル、ロイヤル・フランダース・フィル、ベルリン響、ドルトムント・フィル、ドレスデン・フィル、エーテボリ響、サンクトペテルブルク・フィルなど、各国の著名なオーケストラを指揮している。

オペラでは、プラハ国立歌劇場、プラハ国民劇場などチェコ国内のオペラハウスへの出演はもとより、モンテカルロ歌劇場やウィーン室内歌劇場などで、指揮のみならず、公演制作にも携わっている。

マーラーの出身地カリシュト（現チェコ・カリシュチェ）に近いイフラヴァで開催されている「マーラー・イフラヴァ音楽祭」では、09年にモラヴィア・フィルを指揮してマーラー／交響曲第6番〈悲劇的〉を演奏。また、今年5月には「プラハの春」音楽祭に出演し、チェリストのミッシャ・マイスキーと共演した。

読響とは87年に初共演。東日本大震災直後の11年5月に急きょ代役として24年ぶりに登場、ドヴォルザークやマーラーを指揮し、大喝采を浴びた。

70歳代にして日本で大ブレイク  
チェコ音楽の神髄を伝える巨匠

## ラドミル・ エリシュカ

Radomil Eliška



©佐藤雅英

◇10月28日 大阪定期演奏会

自らの祖国、チェコの音楽の神髄に迫り、その魅力を伝える巨匠。70歳代半ばにしてセンセーショナルな日本デビューを飾ってからほぼ毎年来日し、各地のオーケストラへの出演を通して、絶大な人気を博している。

1931年チェコ共和国（当時チェコスロバキア）生まれ。ブルノ音楽大学にてヤナーチェクの高弟、ブジェジスラフ・バカラ教授に師事。卒業後はチェコ・ユース・オーケストラ等の指揮活動を経て、69年に〈新世界〉交響曲欧州初演で知られるチェコの名門オーケストラ、カルロヴィヴァリ響の指揮者兼音楽監督に就任し、90年まで活躍した。同時期にはチェコ・フィルやプラハ響にたびたび客演、「プラハの春」音楽祭にも出演、ドイツ、オーストリア、旧ソ連に招かれるなど、着実にその地位を固めていった。

演奏活動と並行して78年からプラハ音楽大学（プラハアカデミー）において指揮法を指導し、96年から2008年まで同大学指揮科教授。01年から13年6月までチェコ・ドヴォルザーク協会会長を務めた。その地域色豊かで温かい音楽性は、ドヴォルザーク、ヤナーチェクといった自国の作曲家の作品はもちろん、ブラームスの大家としても高く評価されている。

06年札幌響と大阪センチュリー響（現・日本センチュリー響）に客演し大成功をおさめ、08年に札幌響の首席客演指揮者に就任。それまで演奏活動の中心がチェコ国内及び旧東欧圏であったため、遅れて世界に出てきたチェコの巨匠として注目を浴びた。N響、東京フィル、大阪フィル等とも共演を重ねている。

読響とは今回が初共演。10月30日に東京芸術劇場で開催される《世界のマエストロ・シリーズ Vol. 2》にも本公演と同じプログラムで登場する。

完璧なまでの技巧と  
豊かな音楽性を兼ね備えたピアニスト

## 清水和音

Piano  
Kazune Shimizu



©K. Miura

1960年東京生まれ。弱冠20歳にしてロン＝ティボー国際コンクールのピアノ部門で優勝し、大きな注目を集めた。その後は世界的な指揮者との共演やレコーディングを重ね、近年ではゲルギエフ指揮マリインスキー歌劇場管、アシュケナーズ指揮シドニー響と共演するなど国内外で幅広く活躍し、室内楽の分野でも共演者から厚い信頼を獲得している。

2004年からはショパンの全作品の録音を開始。11年8月には、自身のデビュー30周年を記念して、ラフマニノフの全ピアノ協奏曲と〈パガニーニの主題による狂詩曲〉を一度のコンサートで演奏するという快挙を成し遂げた。

読響とは1983年以降多数共演している。指揮者ヴロンスキー氏の前回来日時（11年5月）にも、モーツァルトのピアノ協奏曲第24番を披露している。

◇10月23日 気楽にクラシック

深い音楽性が聴衆を感動へ誘う  
実力派人気ピアニスト

## 河村尚子

Piano  
Hisako Kawamura



©居坂浩文

兵庫県西宮市に生まれ、5歳で渡独。ハノーファー国立音楽芸術大学在学中、ミュンヘン国際コンクール第2位入賞、クララ・ハスキル国際コンクール優勝を果たし、一躍世界の注目を浴びた。以後、ドイツを拠点に世界各国でのリサイタルや、内外の主要オーケストラとの共演など、国際的な活動を繰り広げている。レコーディングではRCA Red Sealをはじめとする各レーベルからソロ、協奏曲、室内楽など多数のCDをリリースしている。

新日鉄音楽賞、出光音楽賞、日本ショパン協会賞、井植文化賞、文化庁芸術選奨文部科学大臣新人賞、ホテルオークラ音楽賞を受賞。

読響には2009年に初登場、以後共演を重ねている。15年3月にはメンバーとの室内楽公演（よみうり大手町ホール）も予定されている。

◇10月28日 大阪定期演奏会

第11回  
読響メトロポリタン・シリーズ

10.8 (水)

第541回  
定期演奏会

10.9 (木)

第75回  
みなとみらいホリデー名曲シリーズ

10.11 (土)

ブルックナー  
交響曲 第0番 二短調 WAB. 100作曲:1869年1~9月/初演:1924年5月17日、クロスターノイブルク、指揮:フランツ・モイスル(第3・4楽章)、  
1924年10月12日(全楽章)/演奏時間:約46分

## 本当は「第2番」? 「無効」? 若きブルックナーによる試行錯誤の過程

アントン・ブルックナー(1824~96)は、リンツ大聖堂・市教区オルガン奏者として1856年から同地に住み、ウィーン音楽院の教授に着任する68年まで、とどまった。55年よりジモン・ゼヒターのもとで音楽理論を学び、その勉学は6年に及んだ。1861年、ゼヒターのもとで和声法・対位法を修めたブルックナーは、翌年以降、以下のように本格的な創作活動へと歩みを進めることとなる。

1863年:交響曲へ短調

1864年:ミサ曲第1番

1865~66年:交響曲第1番 八短調  
(第1稿)

1866年:ミサ曲第2番

1867~68年:ミサ曲第3番

1869年:交響曲第0番 二短調

1871~72年:交響曲第2番 八短調  
(第1稿)

従来、「第0番」と題された交響曲二短調の作曲は、1863年から64年の間になされたもの(つまり交響曲第1番の前)と考えられてきた。1863年7月から1864年6月にかけて他作品を手がけていない、というのがその理由であり、具体的な証拠などがあるわけではない。長年にわたってブルックナー作品の校訂に携わったレオポルト・ノーヴァクもこの時期の作曲が「皆無」とは言えない、としている。ただ、1868年以降、ウィーンに移り住んだブルックナーが、この曲の総譜を書く際に、「1869年1月24日」という日付とともに「交響曲第2番」と記した、という事実を鑑みれば、この作品が「第1番」の後に続くものとして位置づけられていたことがわかる。だが、この交響曲二短調は公開演奏・出版には至らず、すでに「第3番」として作曲していた交響曲を繰り上げて「第2番」と名

付けることになった。

「第0番」と呼ばれるようになったエピソードも、さまざまな解釈が可能であろう。死の前年(1895)、体調が勝れぬブルックナーは5階から1階に居室を移すべく皇帝に直訴し、ベルヴェデーレ宮殿の空き部屋を使えることになった。この引越しの際に、手許にあった初期作品の多くを破棄したと言われている。この交響曲二短調は破棄するには至らなかったものの、表紙に書いてある「第2番」という数字を消し、その下に「annulliert」という言葉を添えた。「無効を宣言する、取り消す」という動詞「annullieren」の過去分詞であり、語義通りに考えれば「無効」「取り消し」などと訳するのが正しかろう(ドイツ語でゼロは「Nullヌル」。annullierenという語には「ゼロに戻す」という意味合いも含まれる)。その他の部分にも「単なる試作 nur ein Versuch」「無効 ungültig」、あるいは「0」等という記述も見られる。これが「ゼロ」を意味するのかどうかは議論が分かれるが、ドイツ語の通称としても「第0番 Nullte」がある程度定着していることを考えれば、「第0番」という呼称は不適切、というにはあたらなともいえる。

この作品がウィーンで試演された際、指揮者のオットー・デゾフが「第1楽章

の第1主題はどこにあるのか」と訊いたことは、ブルックナーがこの作品の公表に自信を失ったエピソードとして有名である。第1楽章の冒頭は、低弦が二短調主和音をアルペジオ的に8分音符で提示し、これに続く形で、第2ヴァイオリン、第1ヴァイオリンがトレモロ音型で第1主題を提示する。確かに、この開始部分が単なる序奏なのか、第1主題の提示なのかは、デゾフならずともわかりづらい。むしろ、ブルックナーがソナタ形式の中で普通は二つしか用いられない主要主題にもう一つ加えるかたちで、三つの主要主題にこのような初期からこだわっていたことを見逃すべきではないだろう。これに先行する交響曲へ短調(通称“00番”)、交響曲第1番ともに第3主題を見出すことは困難であり、この作品こそが三つの主題を用いたブルックナー最初の交響曲、と見做すことも可能であろう。

またこの作品には先んじて完成していた宗教曲のモチーフが数多く用いられている。第2楽章ではミサ曲第2番の“グローリア”、第4楽章では1861年作曲の〈アヴェ・マリア〉の旋律が聞かれ、ブルックナーが世俗的な交響曲にも敬虔な祈りの意味を込めたことは見逃せない。

楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ベートーヴェン  
交響曲 第7番 イ長調 作品92

作曲:1812~13年/初演:1813年12月8日、ウィーン大学講堂、指揮:ベートーヴェン/演奏時間:約36分

さらなる進化を遂げた、「旋律」と「リズム」の新しい関係

交響曲第5番、第6番の初演において、ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン(1770~1827)はあまり大きな成功を得ることができずに終わる。だが、同じように斬新きわまりない工夫が施された交響曲第7番の初演は「大きな喝采と異例とも言うべき好評をもって」受け容れられた。第5番では、四つの音の執拗な反復、そして「暗黒から光明へ」という作曲家の理想を具現した。第6番では一転して標題性を採り入れ、4楽章形式が普通であった交響曲に五つめの楽章を導入する。ベートーヴェンは、これらの工夫によってとりわけ第5番で失われた旋律の美しさを取り戻そうとするが、細かい音符の反復によって得られる曲全体の統一性も失いたくない。この作曲家は、楽章ごとに特徴的なリズムを与えることによって、両者の問題を一気に解決しようとしたのである。

リヒャルト・ワーグナーがこの曲に対してつけた「舞踏のアポテオーゼ(権化・神格化)」という言葉こそは、この作品が「リズム」を中心にしてできあがって

いることを端的に示している。ベルリオーズの「農民の踊り」という言葉は、具体的には第1楽章の主題部分に対して名付けられたもの。ベートーヴェンはこの曲と、続く第8番で緩徐楽章をなくしてしまうが、葬送行進曲風のリズムに彩られた第2楽章が、その代わりとなっている。第3楽章でも急速なプレストのテンポに乗せて快活なリズムで曲が進むが、この楽章の画期的な点はむしろ、第1楽章で用いられたイ長調に対し、ヘ長調という、遠い調性が用いられた点にもあるだろう。「作曲時、ベートーヴェンは本当に酔っ払っていたのではないか」とまで言われた激しい第4楽章の主題は、この時期イギリスの出版社に依頼されて手がけていたアイルランド民謡の編曲集に収められた作品のひとつ“まじめで分別くさいのはごめん”に酷似しているという指摘がある。大衆の「受け」と自らの芸術的水準を高い次元で融合させた本作が大成功を収めたことで、ベートーヴェンの創作はさらなる円熟期を迎えるのである。

楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

プログラムノーツ

PROGRAM NOTES

飯尾洋一  
いいお よういち・音楽ライター

第575回  
サントリーホール名曲シリーズ

10.17 (金)

第170回  
東京芸術劇場マチネシリーズ

10.19 (日)

スーク

弦楽のためのセレナード 変ホ長調 作品6

作曲:1892年/初演:1894年2月25日、プラハ/演奏時間:約30分

18歳の夏、師ドヴォルザークの勧めで書かれた佳品

チェコの作曲家ヨゼフ・スーク(1874~1935)は1885年よりプラハ音楽院でヴァイオリンと作曲とを学んだ。卒業後もドヴォルザークのもとで作曲の講義を受けて師弟関係を結んでいる。

1892年の夏、ドヴォルザークは学業を終えたスークをプラハ南方のヴィソカー村にある別荘へと招く。それまでのスークの作品にメランコリックな性格を感じとっていたドヴォルザークは、明るく陽気な曲を書いてみるよう彼に勧めた。このとき、ドヴォルザークは後に弟子の妻となる当時14歳の娘オチリエをスークに引き合わせている。師の提案に従って、18歳のスークはこの伸びやかな弦楽セレナードを作曲した。

1893年12月、ターボルで第2楽章の

みが初演され、続いて1894年にプラハで全曲が初演された。作品はチェコ国内でのスークの出世作となり、当時、ボヘミア弦楽四重奏団の第2ヴァイオリン奏者として活躍していたスークを作曲家として知らしめることになった。1896年にはブラームスの勧めで、ジムロックが作品を出版している。

- 第1楽章** アンダンテ・コン・モート 晴朗で穏やかな田園情緒をたたえる。
- 第2楽章** アレグロ・マ・ノン・トロポ エ・グラツィオーソ 優雅なワルツ風。
- 第3楽章** 甘美で夢幻的なアダージョ。
- 第4楽章** アレグロ・ジョコソ・マ・ノン・トロポ・プレスト 快活で躍動感あふれるフィナーレ。

楽器編成/弦五部

マーラー  
交響曲 第1番 二長調 〈巨人〉

作曲:1884?~88年、93~96年/初演:1896年3月(交響曲としての完成稿)、ベルリン/演奏時間:約53分

改作を重ねて誕生した交響曲。自然の息吹、絶望、輝かしい歓喜へ

グスタフ・マーラー（1860～1911）の交響曲第1番は、複雑な経緯をたどって生み出された。当初、作品は2部構成の五つの楽章からなる交響詩として作曲され、1889年に作曲者自身の指揮によってブダペストで初演された。この時点では〈巨人〉の題は掲げられていない。初演は不評を買うが、その後、マーラーは作品を改訂し、1893年にハンブルクで交響曲形式による音詩〈巨人〉として、改訂稿を初演した。マーラーは友人たちの勧めによって〈巨人〉の題を与え、さらに各楽章に聴衆の理解の助けとなるような標題を添えた。〈巨人〉とはマーラーが傾倒していたジャン・パウルの同名の長編小説に由来する（ちなみに国書刊行会による同書の邦訳は全800ページ近くの大著である。ページ数よりも重量2kgに迫る大作と目方で表現したくなるほど）。曲は“花の章”を含んだ全5楽章から構成されていた。

1896年、マーラーはさらに作品を改訂し、このとき“花の章”を削除して4楽章とするとともに、〈巨人〉の題や各楽

章の標題を外し、ここではじめて交響曲の名を与えて、ベルリンで初演している。作曲者が撤回したにもかかわらず、〈巨人〉の題は現在に至っても広く定着している。

**第1楽章** ゆるやかに引きずるように、自然音のように～終始きわめてくつろいで 弦楽器のフラジオレット（倍音のみを響かせる特殊奏法）による独創的な序奏は、ハンブルク稿での標題によれば「冬の長い眠りからの自然の目覚め」を描く。第1主題は自作の歌曲集〈さすらう若人の歌〉の第2曲“朝の野原を歩けば”から。  
**第2楽章** 力強い動きで、しかし急がずに 農民舞曲風のスケルツォに優美なトリオがはさまれる。

**第3楽章** 厳粛に重々しく、引きずらずに ティンパニの刻みに乗って、コントラバスが民謡由来の主題を奏でる。

**第4楽章** 嵐のように激動して シンバルの一撃を伴う激烈な序奏で開始される。当初の標題は「地獄から～深く傷ついた心による絶望の突然の爆発」。絶望はやがて輝かしい歓喜へと至る。

楽器編成/フルート4（ピッコロ持替）、オーボエ4（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3（バスクラリネット持替）、エスクラリネット、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン7、トランペット5、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ2、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、タムタム）、ハープ、弦五部

プログラムノーツ

PROGRAM NOTES

柴田克彦

しばた かつひこ・音楽ライター

気楽にクラシック  
～ヨーロッパ音楽紀行～

第4回  
《モーツァルトも愛した街、プラハ》

10.23 (木)

ヨーロッパを巡る本シリーズ、第4回のテーマはチェコの首都プラハです。この町は、“黄金のプラハ”“中欧の宝石”と称された歴史的な文化都市であり、美しい自然をもつボヘミア地方の中心地でもあります。そしてまたモーツァルトが愛し、愛された町……今回は、そのゆかりの天才が生んだ協奏曲と、地元最大の作曲家ドヴォルザークの最もボヘミア的な交響曲が披露されます。

指揮は、プラハに生まれ、チェコの第一線で活躍するヴロンスキー。3年半ぶりに読響へ客演し、本場の味を堪能させてくれます。ピアノは、日本屈指の名手・清水和音。では、ナビゲーター・中井美穂と解説・小宮正安のお話も楽しみつつ、充実のプラハ旅行を！



解説

小宮 正安 Masayasu Komiya

横浜国立大学教育人間科学部准教授。専門はヨーロッパ文化史、ドイツ文学。著書に『モーツァルトを「造った」男 ケッヘルと同時代のウィーン』（講談社）、『愉悦の蒐集 ヴンダーカンマーの謎』（集英社）、『音楽史 影の仕掛人』『オーケストラの文明史 ヨーロッパ3000年の夢』（春秋社）、『名曲誕生 時代が生んだクラシック音楽』（山川出版社）など多数。『狂言風オペラ』の脚本執筆や『レコード芸術』誌への寄稿など、多方面で活躍。



ナビゲーター

中井 美穂 Miho Nakai

アナウンサー。ロサンゼルス生まれ。1987～95年、フジテレビアナウンサーとして活躍。「プロ野球ニュース」「平成教育委員会」などの番組で人気を集める。現在、「タカラヅカカフェブレイク」（TOKYO MXテレビ）、「松任谷正隆のディアパートナー」（FM東京）にレギュラー出演。97年から連続してメインキャスターを務めるTBS「世界陸上」をはじめ、スポーツ・情報・バラエティと幅広い分野のテレビ番組やCMに出演。演劇コラムの執筆や、クラシックコンサートでのナビゲーター・朗読も行っている。2013年より、読売演劇大賞選考委員を務める。



1786年5月にウィーンで初演されたヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）の歌劇〈フィガロの結婚〉が、同年12月プラハで大当たりをとりました。翌年1月、彼は当地に招かれ、交響曲第38番〈プラハ〉の初演等を行います。そのときオペラの依頼を受け、10月に再び訪問。今度は歌劇〈ドン・ジョヴァンニ〉を初演します。かくしてプラハは、生前のモーツァルトを本拠地のウィーン以上に支持し、天才にも愛された町として名を刻むことになりました。

**ピアノ協奏曲第23番**は、まさにこの頃の作品。〈フィガロの結婚〉と同時期の1786年3月に作曲され、古典派ピアノ協奏曲きっての名作群＝第20～27番の中でも、密度の濃い傑作と賞賛されています。

この曲は、トランペットとティンパニが外され、オーボエの代わりにまだ一般的でなかったクラリネットが用いられて効果を発揮するなど、柔らかな響きが意図されています。曲調は明快で、喜劇的な〈フィガロの結婚〉との共通性を感じさせると同時に、短調の第2楽章が深い感銘をもたらします。また第1楽章終盤のカデンツァ（独奏者が当時は主に即興で腕を披露していた部分）を、モーツァルト自ら譜面に記してい

ますが、これは彼には珍しいケース。即興演奏を許さないこの姿勢は、究極の仕上げを意味するともいえるでしょう。

**第1楽章**（アレグロ）は、流麗な二つの主題を軸に進行。**第2楽章**（アダージョ）は、深く沈んだ歌が流れ、両端の楽章と対照されます。**第3楽章**（アレグロ・アッサイ）はリズムカルに弾んだ終曲。軽快なメイン主題の合間に、曲想の異なる副主題がいくつも登場します。

一方、アントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）の**交響曲第8番**。プラハから30kmほど離れたネラホゼヴェス村に生まれたドヴォルザークは、16歳以降、プラハを拠点に活動し、この町の歌劇場のヴィオラ奏者や教会のオルガン奏者を経験後、プラハ音楽院の教授や院長を務めました。

第8番は、第9番〈新世界から〉と並び人気交響曲。既に大家となりつつあったドヴォルザークは、1885年自然豊かなボヘミアのヴィソカー村に別荘を持ったのをきっかけに、絶対音楽と民俗音楽が融合した独自の作風を確立していきます。第8番はその流れの中で生まれた代表的な1作。1889年秋、一気に作曲され、翌年作曲家自身の指揮で初演されました。

この曲、以前は〈イギリス〉と呼ばれ

ていましたが、由来はそれまで作品を出版していたドイツのジムロック社と折り合いが悪くなり、イギリスのノヴェロ社から出版されたというだけのこと。実際は、地元の自然のイメージを音にした「ボヘミア」と呼ぶべき内容で、一部で称されている「自然交響曲」も、あながち遠からぬネーミングです。ドヴォルザークの交響曲のうち、第7番までの各曲はブラームスやワーグナー、第9番〈新世界から〉はアメリカの民俗音楽の影響を受けていますので、第8番はボヘミア色が全編を支配した唯一の交響曲ともいえるでしょう。

曲は円熟期の音楽性がフルに発揮された充実作であり、かつ独創性も充分。第1楽章冒頭の憂いに充ちた旋律は、ト長調を基本とする楽章でありながらト短調で書かれた、意外性のある手法です。第2楽章の自然を彷彿させる雰囲気や幅広いダイナミクス、第3楽章の哀愁漂う美しさも特筆もの。珍しい変奏曲である上に別の主題が加わる第4

楽章もユニークです。また1曲目のモーツァルトではクラリネットが活躍しますが、交響曲第8番は全体に（特に第1楽章）フルートが際立っています。

**第1楽章**（アレグロ・コン・ブリオ）は、序奏の旋律やフルートが歌う明るい主題をはじめ、短調と長調の旋律が交代しながら、伸びやかな音楽が繰り広げられます。**第2楽章**（アダージョ）は、田園的で哀感を湛えた主題に始まり、木管楽器で小鳥の鳴き声のようなフレーズも登場。時に激しく盛り上がり、中間部は明るく優美で活気が増します。**第3楽章**（アレグレット・グラツィオーソ）はスラヴ舞曲風。メランコリックな主部に、明るくも切ないワルツの中間部が挟まれます。**第4楽章**（アレグロ・マ・ノン・トロッポ）は、ファンファーレに続いて、チェロが出す主題をもとに、変化に富んだ変奏が展開されます。途中で第2主題ともいえる短調の旋律も登場。最後は輝かしく結ばれます。

## モーツァルト ピアノ協奏曲 第23番 イ長調 K. 488

作曲:1786年/初演:1786年3月、ウィーン(推定)/演奏時間:約26分

## ドヴォルザーク 交響曲 第8番 ト長調 作品88

作曲:1889年/初演:1890年2月2日、プラハ/演奏時間:約34分

非破壊検査 Presents  
大阪定期演奏会

10.28 (火)

スメタナ

## 歌劇〈売られた花嫁〉序曲

作曲:1863~66年3月、69~70年改訂/初演:1866年5月30日、プラハ(決定版初演は1870年9月25日)/演奏時間:約7分

## 農村の祭りを活写して、沸き立つような興奮を伝える佳品

日本では連作交響詩〈我が祖国〉、わけてもその第2曲“モルダウ”によって知られるチェコの作曲家ベドルジハ・スメタナ(1824~84)は、生涯に8作の歌劇を完成させた。その第2作〈売られた花嫁〉は、1866年にプラハ暫定劇場で初演された際には不評だったものの、その後たびたび改訂の手が加えられて同劇場のレパートリーに定着した。また1892年にウィーンで上演されて以後は、ドイツ語圏を中心に世界各地の歌劇場で手がけられており、スメタナの歌劇中、最も人気の高い作品といえる。

とある農村の娘マルジェンカの結婚をめぐる騒動を描いた物語を彩るにあたって、彼は既存の民謡や民俗音楽を直接引用したり模倣したりはほとんどしなかつ

た。あちこちに挿入された民俗舞曲の体裁をとったナンバーも、あくまでクラシック音楽の書法に則<sup>のつと</sup>って自身で新たに書き下ろし、強い民俗的な薫<sup>かお</sup>りを打ち出すことに成功している。しばしば単独で演奏されるこの序曲においても、スメタナは中核部分に古典的なフーガ風の音楽を据えながら、その高揚によって農村の祭りの熱狂を活写し得て見事である。

なお、スメタナは歌劇の作曲に際し序曲をいちばん最後に手がけることを習慣としていたが、〈売られた花嫁〉では例外的に、早い段階で序曲を完成させている。そのせいか歌劇本編からの引用は多くないものの、沸き立つような喜ばしさをたたえた音楽は、物語全体の雰囲気をよく伝えてくれる。

楽器編成/フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

モーツァルト

## ピアノ協奏曲 第21番 ハ長調 K. 467

作曲:1785年3月9日完成/初演:1785年3月10日、ウィーン/演奏時間:約29分

## モーツァルトの充実期を代表する、スケールの大きいピアノ協奏曲

1785年3月、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756~91)は自ら出演する予約演奏会において新作のピアノ協奏曲を披露した。これが第21番として知られるハ長調の協奏曲 K. 467である。前月には同じく予約演奏会でピアノ協奏曲第20番 二短調 K. 466を初演したばかりだった。協奏曲には珍しい短調を採用した20番に続き、このハ長調協奏曲においても、それまでの「平明で華やかな雰囲気とともに独奏者が腕前を開陳する」といったピアノ協奏曲の枠組みを大きく超え、独奏者と管弦楽が一体となって密度の高い音楽を織り上げる、交響曲的とも言える世界が繰り広げられていて、当時のモーツァルトの気力の充実ぶりをうかがわせる大作となっている。

**第1楽章** アレグロ 行進曲風の明るく力強い足どりの第1主題によって幕を開ける。協奏的ソナタ形式によるが、軽快かつ優美な第2主題に対して第1主題の比重が大きく、対位的な書法を交えつつ、全曲を大きく支配する。ハ長調とい

う明朗な調性をとりながら、随所に短調のパスセージがあらわれて陰を落とすほか、転調が目まぐるしいほどに積み重ねられて、スケールの大きい音楽を築き上げる点が印象的である。

**第2楽章** アンダンテ 3部形式。冒頭、穏やかな3連符の連続に乗って晴朗な旋律が、繊細な和声の揺らぎを伴いながら歌い上げられていく。中間部では新しい旋律があらわれて、次々と調性が移り変わった末に、冒頭の旋律が新しい調性で回帰し、結尾へとつながっていく。

**第3楽章** アレグロ・ヴィヴァーチェ・アッサイ モーツァルトらしく活力に満ちたロンド・ソナタ形式によるフィナーレである。主導権はピアノが握りながら、管楽器陣が華やかな色彩を添え、軽快な流れの中で全曲が締めくくられる。

なお、欧米ではこの曲を〈エルヴィラ・マディガン〉と呼ぶことがあるが、これは第2楽章を伴奏音楽に用いて大ヒットした同名のスウェーデン映画(1967年、邦題は『みじかくも美しく燃え』)に由来する。

楽器編成/フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

# ドヴォルザーク

## 交響曲 第9番 ホ短調 作品95 〈新世界から〉

作曲:1893年1~5月/初演:1893年12月15日、ニューヨーク/演奏時間:約40分

### アメリカでの生活と故国への郷愁が実を結んだ傑作交響曲

アントニン・ドヴォルザーク(1841~1904)は母国チェコに本拠を置いて活躍しながら、30代に知己を得たブラームスの尽力もあって、国外においても高い名声を得た。アメリカのニューヨーク・ナショナル音楽院の院長に就任し、1892年から95年にかけて新大陸に滞在したのも、そうした知名度の高さゆえのことであった。

アメリカで彼は、熱心に教育に携わるかたわら、彼の代表作となる傑作を次々に発表する。交響曲第9番 ホ短調〈新世界から〉もそのひとつである。彼は新大陸滞在中にアメリカ先住民の文化や黒人霊歌に触れて刺激を受け、それらのリズムや旋法をよく研究し、その成果をこの作品にも採り入れている。

**第1楽章** アダージョ~アレグロ・モルト ソナタ形式。静謐せいひつに始まり、劇的に展開される序奏の後、ホルンが分散和音による第1主題を提示する(この主題は以後の楽章にも登場して、全曲を緊密にまとめ上げる役割を担う)。提示部はこの第1主題部と、その後木管によるポル

カ風の第2主題部、フルート独奏で登場する第1主題から派生した旋律による小結尾からなり、展開部では主に第1主題と小結尾主題が扱われる。

**第2楽章** ラルゴ 金管の壮麗な序奏の後、イングリッシュ・ホルンが歌う主題は〈家路〉のタイトルでも知られる。この〈家路〉の部分の後、新たな旋律が切々と歌われ、さらに第1楽章第1主題が回想されて音楽は大きく高揚する。最後は〈家路〉の主題とともに静かに終わる。

**第3楽章** スケルツォ モルト・ヴィヴァーチェ 性格の明確に異なるエピソードを連ねた3部形式の主部と、第1楽章第1主題の回想に導かれる明るい民謡調のトリオからなる。

**第4楽章** アレグロ・コン・フォーコ トランペットとホルンが提示する決然とした気分の第1主題と、ノスタルジックな第2主題からなるソナタ形式をとるが、展開部では先行する3楽章の主題群が次々と登場する点がユニークである。結尾では第1主題と第1楽章第1主題が重ねられて、力強いクライマックスを築く。

楽器編成/フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(シンバル、トライアングル)、弦五部